

# Pearl S. Buck における自然主義とその背景

## —— The Good Earth の視点から ——

佐 藤 重 夫

- 〈目 次〉
- I はじめに
  - II 文学的普遍性
  - III 表現の特質：文体と構成
  - IV ロマン主義と自然主義
  - V おわりに

## I はじめに

Pearl Buck の *The Good Earth* が世に出たのは、1931 年 3 月 2 日、彼女が 40 歳のときだが、この作品によって彼女は、文学的な金字塔を打ち立てたことになる。多年にわたる中国の、ある農民家族の歴史と生活を描いたこの長編小説は、後にアメリカ文学史の中で、最も有名なベストセラーの一つとなり、海外でも広く愛読されてきた作品である。しかし、かなり多くの海賊版も世に出回ったようだが、それを除いても 30 カ国以上の言語に翻訳され、<sup>(1)</sup> 少なくとも中国語だけで 7 つの違った方言で訳されている。<sup>(2)</sup> しかも、出版された翌年の 1932 年には、すでに Pulitzer Prize を獲得しており、このことが大きな力となって、数年後には Howell's Medal for Distinguished Fiction も受賞している。更に、これが後のノーベル文学賞受賞の重要な要因となったのである。*The Good Earth* はブロードウェイの演劇にも上演され、<sup>(3)</sup> 更に Paul Muni と Louise Rainer 共演による映画にも上映されている。<sup>(4)</sup>

中国での長い生活体験から、Pearl Buck は中国の庶民に対し、実に温かい愛情を抱いていた。<sup>(5)</sup> 中国は農業国であり、農民は全人口の 4/5 も占めている。このような、圧倒的に多い農業人口を擁しながら、農民は中国で最も虐待された集団であったのである。つまり、政府高官、盗賊、地主などから、絶えず酷使され、さげすまれてきた。その上、生活のためには、度々起こる洪水や飢饉など、恐ろしい危難と闘っていかなければならない運命にあった。こうした災害が発生して、南部地方か、ほかの安全地帯へ逃がれなければならない場合でも、農民たちは必ず自分の故郷を捨てるということはなく、落ち着けば必ず元の故郷へ戻ってきたのである。善良で、しかも忠実な、これら農民たちが中国の土台を支えているという確信を、Pearl Buck は常にもっていた。<sup>(6)</sup> 人間としての農民に関心を抱き始めたことが出発点となり、農民の中国に対する愛情が、Pearl Buck の思想や創作活動での主な要件となったのである。この要件を満たし、具体化した代表的作品が *The Good Earth* である。この作品を通じて描かれる Pearl Buck の文学的特異性を、ある断面から考察し、彼女の主張する自然主義

の実体を探るのが本稿の狙いである。

## II 文学的普遍性

後年、名作と呼ばれるようになった *The Good Earth* を執筆し始める際、Pearl Buck は、この作品を何か意義深いものにしたい、という強い決意をもって臨んでいる。幸い、5年間も暮した中国の北部地方の情景を鮮明に思い浮べることでもできたし、中国の中でも、特によく知っている南京の町へ、北部地方からの農業避難民がかなり多く流れ込んできたこともよく記憶していた。従って、何よりもこの作品を書かせようとした、大きな動機と言えば、常に抑圧され、虐待される中国人の憂き目に対する、彼女の激しい怒りの発露であったのである。

*The Good Earth* 執筆の際、Pearl Buck は次のように告白している。

There was not plot or plan. Only the man and the woman and their children  
stood there for me.<sup>(7)</sup>

だが、その後彼女は、この作品に描かれている人々が、単なる中国人だけに留まらず、世界の全農民を代表している、という認識をもつようになった。喜びも、失望も、すべては万人共通のものとして描こうとしている。このことは、読んでいてすぐ見当がつく。

*The Good Earth* の文学的発想は、1928年9月に“Asia”という雑誌に掲載された短縮小説 *The Revolutionist* の中に秘められている<sup>(8)</sup>。この小説に登場する主人公の名は Wang Lung と言い、Pearl Buck は、*The Good Earth* 中の主人公にも Wang Lung と名付けている。そして、筆を進めているうちに、この小説の題名を単に“Wang Lung”と決定したが、完成して決定稿を出版社へ届けると、出版社の希望もあり、結局、題名は *The Good Earth* と変更せざるを得なかったのである。

さて、ここに登場してきた *The Revolutionist* という短編小説は、中国の、ある貧困な農民をテーマにしたもので、どちらかと言えば、いささか真面目すぎ

る作品であるが、反面、こっけいなところのある物語でもある。農民が再三の南京旅行で革命家たちに会い、そして彼らの演説を聞く。貧しい人々が裕福になると、どんな表情になるのか、といろいろ物思いにふけるうちに、自分の頭髪を剃り落そうと決意する。革命家たちには必ずそうする仕来りがあるので、ご多聞にもれず、彼も頭髪を落して、“Wang the Revolutionist”と呼ばれるようになる。革命の反逆者となった他の7人の仲間は捕縛され、打ち首になる。Wangは自分の関係する、いかなる騒乱事件にも無罪となる幸運児だが、常に生命の危険にさらされていた。暫くして革命が起ると、彼は略奪に参加して、少々の金品を手に入れようとするのだが、事はうまく運ぼうとしない……。以上がThe Revolutionistの大体の筋である。

The Revolutionistは2カ所だけThe Good Earthと類似しているところがある。Wang Lungが革命家たちの演説を聞く、という点と、略奪事件に参加するというくだりである。しかし、この類似点は、それほど重要なことではない。類似点があるということよりも、類似場面でThe Good Earthの中で描かれている表現が、より手際よく、念入りに取り扱われており、その上、Wangという人物がかなり知的に描写されていることに注目すべきである。つまり、この長編小説では、Wangはもはや無精者ではなく、浅はかな愚かものでもない。しかも、コミック的な人物にも描かれてはいない。あくまでも真面目で、満足するほどの堅実さをもつ性格として扱われている。これが読者に明確なイメージを与えているのである。

登場人物や背景場面などの、こうした鮮明な描写が、The Revolutionistには見られないThe Good Earthの特徴と言うことができよう。たとえ、この小説をかなり昔に読んでいたとしても、かつて読んだことのある人であれば、近づいてくる結婚式へのWangの不安や、飢饉、洪水に見舞われる災害のこと、O-lan (Wangの妻)の勤勉さや冷静さ、裕福になれば、内妻を囲うようになるWangの姿、そしてこの世を去ったあと、Wangの残した土地を売り飛ばそうとする、常軌を逸した息子たちの欲望などの描写には、まざまざと記憶を呼び起こしてくれるだけの力強い筆致力がうかがえるはずである。

このような鮮明な表現力をもたらし理由の一つは、この作品のもつ様々な描

写力の普遍性という点にあるものと考えられる。例えば、結婚式の場合の描写を取り上げてみても、独得な、その結婚当日の描写が、一般の人々に納得できるような形で浮き彫りにされている。それに幾多の出来事——つまり、長男の誕生に対する期待感と喜びや、貧困と病気による苦難、親類の悪意、家族の死の悲劇、教養ある息子たちに対する父親の満足感、両親に対する子供たちの忘恩、兄弟の嫉妬や喧嘩、戦争による窮乏、そして、天然災害といった描写なども、時間と空間を超越して、いかにももっともらしく響いてくるのである。その他の数多くの出来事についても、ある批評家が述べているように、「絶えず人間らしい経験<sup>(9)</sup>」を伝え、そして、「人間らしい態度を世界共通語に」移し変えているのである。The Good Earth を読者の心情に深く感動させるのは、この作品が事実であることや、われわれの個々の生活と全く類似しているからである。つまり、生活がありのままに描かれているということである。すべてが事実で、すべてが信頼できるということである。The Good Earth は、まさしく E. M. Foster の言う “The final test of a novel will be our affection for it.” を強く裏書きしている小説であると言える。

更に、人生の浮き沈みや変化、絶間なき移動、つまり、春から冬へ、種まきから刈り入れへといった季節的な変化ばかりでなく、家族や人間にいたる動作までが、写実的に手際よくまとめられている。過去は現在につながり、現在は未来へと結びついているのである。かつて、Thornton Wilder が American Academy of Arts and Letters から金賞を獲得した際、この作家について Pearl Buck は、次のように述べている。

Part of his youth was spent in China, and no one can live in that tremendous country, where time is measured in centuries and space by landscapes as various as the world provides, without being shaped by eternities.<sup>(10)</sup>

ここで述べている “being shaped by eternities” という、この同じ感覚が The Good Earth の特徴の一つでもある。

大河小説としての The Good Earth は、何世代にもわたる Wang 一族の姿を紹

介し、権力と富が次第に栄えていく、この家族の成長過程の分析を試みている。中国におけるこのような家族は、農夫として働くことから始まる、と Pearl Buck は述べている。もし、周囲の事情がよければ、農夫である Wang 一家の発展振りや貫禄も一層拍車がかかったことだろう。しかしながら、この点について Pearl Buck は、こうした家族は、その住む風土から発展する、つまり、その土壌から成長していくものだ、と言明している。

Wang 一家の成長過程で強調される周期的変化は、Hwang 家の崩壊によって相殺されていく。Wang Lung が嫁を貰いに Hwang 家へ初めて訪れたとき、Hwang の大邸宅の美しさに圧倒されてしまう。このときの Wang は、貧しい上に、気が小さく、落ち着きのない農民であった。そして、彼の将来の妻となるものが、Hwang 家で奴隷のようにして働いていた炊事係の女である。繻子織りのローブを着飾った同家の老女主人が、美しい彫刻で飾られた高座に座り、炊事係の O-lan を Wang に引き合わせると、彼は畏縮してひざまずくのである。しかし結局は、何年か過ぎ、ぜいたくで墮落し切った、ずさんな管理を欲しいままにしたため、Hwang 家は崩壊してしまう。邸宅の多くは、市街から流れてきた貧困な無宿者たちの手に渡ってしまう。素晴らしい集会所は荒れ放題、いくつかの建物も荒廃する。その後長い歳月が過ぎてから、Wang Lung は自分の家族のものとするために、朽ち果てた、この大邸宅を購入することになる。興亡という、このコントラストは、それほど強調されてはいないが、時の流れというものに対しては、静かではあるが厳しい緊張感を与えている。

The Good Earth が特に訴えようとしている、もう一つの明確な特徴は、英語国の人々にとって余り親しみのない人種を取り扱いながら、常に普遍性を無視しないよう、念頭に入れていることである。James Gray は、Pearl Buck を称して、西欧の読者に “sanity, compassion and understanding” の心で中国を知らしめようとしている作家である、と述べている。<sup>(11)</sup> また、ある批評家はこうも述べている。

The Good Earth made American readers aware, in the lives of a completely  
alien people, of universal human bonds.<sup>(12)</sup>

また、Carl Van Doren は、こうも述べている。

In the United States, which had a special friendly liking for China, *The Good Earth*<sup>(13)</sup> for the first time made the Chinese seem as familiar as neighbors. Pearl Buck had added to American fiction one of its larger provinces.

この作品に秘められた本質の中に、真に迫ろうとする人物描写、根拠の確かな背景、そして、誕生、結婚、苦勞、死、その他極めて重要な基本的出来事に対して、すべてがうまく対応する普遍性が込められて、初めてそこに以上のような評価が得られるのである。

更に、適確な詳述描写を慎重に扱い、それに重点を置いていること、これが経験的な類似性を一層高めている結果となっている。従って、読者には、中国における新年の風習や結婚式、葬式、食事の準備、そして、農耕の方法といった具象面を、素晴らしい描写力で紹介している。しかも、その描写は決して誇張したものではなく、途方もないことを叙述しているわけでもない。簡潔さが常に中心となり、具体的に、綿密な観察のもとに必要な欠くべからざる詳述を施している。確かに、われわれのイメージとして捉えている、その情景は、欧米人の読者にとっては遠い国での展開であり、伝統的な風習や行事の多くはエキゾチックで、絵のように美しいものであるけれども、時代を背景とした、これら風習などの詳しい描写は、論理的に絶対必要な条件であり、その現実性を垣間見ることができるのである。無駄がなく、しかも簡潔で鮮明な叙情性をうかがわせる *The Good Earth* の文章は、まさに Ernest Hemingway の作品を思わせるものがある。文体には不要なものが全くない。ただ、情景の伝達、雰囲気(14)の強化に必要なことだけが記録されているのである。

### III 表現の特質：文体と構成

*The Good Earth* の文体は、この小説の最も印象的な特質の一つである。物語作家の書く古代中国の説話風の大河小説の作風や、欽定英訳聖書の甘美な響き

をもつ散文体を主体とした文型であるからである。かつて、Pearl Buck は自分の文体が聖書的であるというよりも、むしろ中国語的な文型に近い、と述べたことがある。その説明によれば、彼女は中国語の語法を学び、中国の慣用語法を常用した、ということである。従って、中国の題材を取り上げた場合、叙述は精神的には中国固有の発想で考え、あとから英語に翻訳するといった過程をたどっている。自分の書く散文が慣用語法の多い中国語に基づいていることや、文体に関する英語的属性については、不明確な点が多い、と彼女自身告白している。<sup>(15)</sup> とは言いながら、自分の文体が古代中国の長編小説と欽定英訳聖書の双方の影響を受けていることも自認しているのである。<sup>(16)</sup> この2形体の表現形式の間には、対句法の利用から、古風な、というより擬古調に近い表現法にいたるまで、数多くの類似点が見られる。Pearl Buck の幼女期には家庭で、よく欽定英訳聖書を学び、大声で朗読していたという。しかも、聖書の多くの言い回しは意識的にも、無意識的にも、少女である Pearl Buck の心に焼きつけられ、それが基本となって彼女の文体の一部となっているものと考えられる。従って、中国の長編小説と聖書から受けついだ二重の影響が、彼女の文体的マンネリズムを構築していることを、はっきりと物語っている。<sup>(17)</sup>

The Good Earth における Pearl Buck の文章の特徴は、簡潔で具体的、そしてかなりの長文で、対句法の多用がみられ、均衡を保ちながら言葉の重複が随時行われていることである。どちらかと言えば、文章の大部分は長めではあるが、それが突如、比較的短く、ときには文体にむらのある思考の断片となり、波打つような話の筋が展開されていくのである。その文体は、一般にゆったりとした落ち着きがあり、形式ばらない風格と真面目さをかもし出している。このことは聖書に見られる比喩的表現の色彩、つまり豊かさと少しも競合するものではない。それは主として新、旧両約聖書の、より理想的でエキゾチックな色彩を出すよりも、むしろ中国の長編小説に見られる簡潔な言葉の選択が守られているためであろう。時折、Pearl Buck の文体には詩的な連想が呼び起こされるが、普通の文体と、East Wind: West Wind(1930)に見られるような文学的効果を狙った「華麗な章句」を用いて際立たせる詩的な文体との間には、決して不均衡が見られない。



The Good Earth に用いられる文体は、大河小説に極めて適していると言えよう。散文の簡潔さと、ゆったりとした、着実な筋の運び具合が、如何にも荘重な性格を帯び、この物語にはぴったりとしているのである。The Good Earth の文体とその題材との関係について、Carl Van Doren は分り易く次のように語っている。

Fluent and flexible, it was simple in idiom and cadence, like a realistic pastoral or a humane saga…… In The Good Earth…… the style is regularly supported by the matter. The style gives an agreeable music to the convincing history. Nor was it more convincing in America, in the midst of the depression, than elsewhere. The depression touched all peoples. Even where they were not threatened with immediate famine, as in the starvation chapters of the book, they saw that complex systems of life had broken down. It was not certain that anything but the land remained. Wang's hunger for land, and his obstinate clinging to it once he had it, touched responsive sentiments in every country.<sup>(18)</sup>

Phyllis Bentley は、Pearl Buck の散文の明快さを論じ、その文体が時間と空間の観点からみて、彼女の描く人物像に全く適応していると述べ、次のように力説している。

Pearl Buck never uses a Chinese word, never needs to explain one. Even "Mah-Jongg," for example, is called "sparrow dominoes" ——and very rigidly, since that is what the Chinese word means to the Chinese. On the other hand, Mrs. Buck never, I think, uses a word for which a literal translation into Chinese could not be found. The effect of her prose is to us…… [Her prose is] grave, quiet, biblical speech, full of dignity, in which Mrs. Buck, without ever "raising her voice," is able to render both the deepest and the lightest emotions.<sup>(19)</sup>

聖書的文体というのは、近代の大河小説の特徴でもある。Alexander Cowie

は、The Good Earth は叙事詩か大河小説に密接な関連があると指摘し、この秀作をこの種の、最も一般的なアメリカの小説と称している。彼は大河小説の作家たちが選ぶ素材に対する客観性、というより冷静なアプローチに言及した際、<sup>(20)</sup> Pearl Buck の作品が Ole Rølvaag の作品に類似していることを記録している。更に彼は、大河小説のような物語は、とかく主観性や道徳的考察を避けるものであるが、人物や情景の描写には、強い共感が込められている、と述べている。<sup>(21)</sup> この傾向は、The Good Earth に極めて際立っている。

構成面での The Good Earth は、年代順を追う形式を採り、かなり規則正しいペースで進められている。クライマックスもいくつかあるが、どれも普通の挿話の域を脱してはいない。筋の進行もゆっくりとしており、特に O-lan が死んでからは、いささか面白味がなくなり、大河小説としての多少の緩慢さが見られるのは避けられないことであろう。

Pearl Buck の構成についての Phyllis Bentley の論評は、まさに当を得ている。

[Her] stories take the epic rather than the dramatic form; that is to say, they are chronological narratives of a piece of life, seen from one point of view, straightforward, without devices: they have no complex plots, formed of many strands skillfully twisted, but belong to the single-strand type, with the family, however, rather than the individual as a unit.<sup>(22)</sup>

The Good Earth は家族単位を特に重視しているので、家族の運命の起伏を分析することも極めて大切なことではあるけれども、登場する主要人物は、大変綿密に調べ上げられている。Wang Lung の性格描写も極めて率直である。彼の強さや脆さもよく吟味されて読者の前にさらけ出されている。通り一遍の読書では、彼の性格は一面的にしか捉えられないが、実際はあらゆる種類の人間感情を持ち合わせているのである。例えば、嫁を貰いに Hwang 家へ初めて訪れたときの彼は、無作法で気の小さな男であり、更に多くの土地を購入しようと決意したときの彼は、強情で意志の強い男となり、自分の叔父が盗賊団の一員であることを知ったときの彼は、卑屈で小心ものへと変身する。精神薄弱な娘や、

息子の内縁の妻 Pear Blossom には優しくなる。Lotus に対して、初めて強烈な情熱を燃やしたときは、まるで腑抜けになり、ある女たちの手だまに取られたりする。O-lan が大切にしていた 2 本の真珠の首飾りを奪ったときは、信じられないほど思いやりがなくなり、冷酷な人間となる。Hwang 家の外側の中庭にたむろする無宿者たちに対する彼の態度も、紳士気どりで無情となる。叔父や後妻にアヘンの贈り物をするときには悪賢く、抜目のない男となる。仕事がなく、ただぶらぶらしていることもあり、絶えず働いていることもある。献身的で勤勉な人間にもなる。年とれば、慰めや心の安らぎのみを求めようとしたり、息子たちの気嫌をとろうとする。あれやこれやと彼は、複雑な多面性を持っている。土地に対する強い執念を抱く彼ではあるが、気まぐれで、情緒的、奇抜なところがあったり、矛盾したところがあり、そして、様々な態度を兼ね備えた一人の人間であり、それが鮮明な個性を描き出している。

O-lan の性格も、同様に際立っている。根気強さや、殆ど口もきかぬ態度こそ、読者に絶えず強力な印象を与えている。とは言え、彼女もまた、理解しかねる面もないわけではない。例えば、長男を晴れ着で着飾ってやりたいと思ったり、正月に Hwang 家へ里帰りするとき、特別なお菓子を作ったり、自分がどんなに裕福な暮らしをしているのか、いかに夫婦仲がよいか、そして、初めて授かった子供が健康で、器量よしであることを顯示しようとする点などである。O-lan の生活からは、何も期待できるものがないだけに、こうした自尊心が、とくに痛ましく感じとられる。自分の家に Lotus の女中が来ていることを非難しようとするときでも、ものわりのよさを示そうとしたりする。この女中というのは、Hwang 家にいたときの先輩格であり、異常に残酷な、口やかましい女である。だが、O-lan がいくら非難を加えようとしても、Wang Lung にこの事態を改めさせることができない。にも拘らず、O-lan には、少なくとも受身の抵抗という手段がある。しかも、彼女独得の方法でやれるわけである。O-lan には楽しみというものが殆どないが、ただ自分が死を直前に迎えたときの最後の願いが唯一つあった。自分の主人のために孫が生まれ、また、義父のためにはひ孫が生まれるように、早く長男が結婚するのを見届けたいという願望である。その結婚が果されたとき、自分がかつて奴隷であったが、立派に息子を生み、また、その

子供たちが子孫を生んで、家系を繋いでくれるだろうという慰めの気持ちを抱きながら、仕合わせにこの世を去ることができるのである。Oscar Cargill は *The Good Earth* の批評の中で、O-lan のあらゆる状況下での、夫への献身的な愛情を強調し、次のような詩文で結んでいる。

Earth of the earth-earthy, she triumphs in the end over her rivals, though her  
 ungliness goes clear to the bone.<sup>(23)</sup>

予期されたように、この小説に出てくるその他の人物は、Wang Lung や O-lan ほど巧みに描かれてはいない。Wang の父に対する描写は真に迫ったものがあり、父の咳払い(朝になると、wang が必ず聞く最初の音)や孫たちに会える楽しみ、そして、眠りぐせのあることなどのくだりは、忘れられない描写であるのは事実であるが、しかし、Wang Lung の息子たちについては、どちらかと言えば、大ざっぱにしか描かれていない。つまり、彼等の特徴だけを叙述する嫌いがある。例えば、長男は金使いが荒いが、礼儀作法に気をくばり、次男は強欲で締めまり屋、三男は反抗精神の持ち主で、我儘者である、という風である。Wang の叔父についても、盗賊との関係がいかにも虚構であるかのように描かれている。しかも彼は、いとも簡単にアヘン常習者に仕立てられてしまったりする。これは、Wang Lung を盗賊とのトラブルから自由にするため、作者である Pearl Buck が叔父の立場を意識的に手を加え、できるだけ早くこの場面から叔父の姿を取り除くための急場しのぎの解決策として、アヘンを与える結果にしたのではないと思われる。

Hwang 家の威光を挽回しようとする長男の雄大な計画に、Wang Lung がいいやいやながら屈してしまう描写などは、いかにも不自然である。こんなとき、Wang はいつも受け身となり、息子の意見にすぐ傾いてしまう。しかしながら、*The Good Earth* について、Oscar Cargill は次のような信念を述べているが、一般的にはこれに異論を差しはさむのは困難である。

The book's greatest merit is the conviction it carries of verisimilitude to all

the vicissitudes of Chinese life — nothing changes or passes which does not seem probable.<sup>(24)</sup>

#### IV ロマン主義と自然主義

The Good Earth に漂うロマンチズムの、はっきりしない面について言及しよう。

Pearl Buck は、不自然なロマンチズムや、East Wind: West Wing の魅力を弱める結果となった、明らかな感傷主義を巧みに避けている。しかし、The Good Earth のストーリーは、説得力のあるリアリズムを堅持しながら、挿話に更に魅力を添える、ある種の魅惑的な色彩を帯びている。異様な話がありふれたものとなり、また、ありふれた話が異様で楽しいものとなっている。事実、William Wordsworth(1770~1850: イギリスの桂冠詩人)の “Lyrical Ballads” の序文に次のように述べているが、これが The Good Earth のこの状況に全く符合している。

The principal object……Was to choose incidents and situations from common life……to throw over them a certain coloring of imagination, whereby ordinary things should be presented to the mind in an unusual aspects; further, and above all, to make these incidents and situations interesting by tracing in them, truly though not ostentatiously, the primary laws of our nature.

The Good Earth の場合は、そのぼんやりとした色彩が、ありふれた要素を新鮮味と魅力で明るいものにしている。リアリズムとロマンチズムとが、ほどよく均衡を保っているのである。人生には伝説の光が与えられ、伝説には人生の香りが与えられる、ということになる。

The Good Earth の本の 2 ページ目に Proust の “Swann’s Way” からの引用がのっているが、その題辞は真理、愛情、人間愛の深い感情で Swann を深く感動

させた Vinteuil の奏鳴曲の一節に、それとなく触れている。この題辞は音楽家 Vinteuil が自分の主観的な感情を作曲に加えることを避けたことを述べている。Vinteuil は音楽における生命と真理を捉えようとしていたので、音楽を個人的な態度でゆがめるということを望まなかった。つまり、その題辞は The Good Earth の客観性を伝えようとしているのである。Pearl Buck は、自分の作品が創作ではなく、単に人生を原稿用紙に写し変えているに過ぎない、とはっきりと主張している。William Lyon Phelps もかつて、The Good Earth の作者が無名の人であれば、その人が男性か、女性なのか、急進派の人か、保守派の人か、宗教信奉者なのか、無神論者なのか、などをせんさくする読者はいなかったであろう、と述べている。この小説は極めて客観的、かつ没個性的なものであるため、ほとんど著作者の気質とはかけ離れた存在となっているように思われるのである。

生と死の不変の周期、栄枯盛衰、そして、不断の変化を公然と示す以外に、The Good Earth の「教訓」は何ら述べられていないので、推論する外はない。この小説が強く暗示しているのは、忠実に苦勞<sup>(25)</sup>さえすれば、ある満足感は得られるが、ぜいたくすれば、「人生の精神的意義」は朽ち果て、崩壊してしまう、ということである。また、この作品が「勤勉、節約、不断の活動、そして、その土地に密着した生活の価値感を信ずる年老いたアメリカ人」<sup>(27)</sup>の考えを支持しているのも確かである。しかし、このような「教訓」がこの小説の中から引き出せるものとしても、その主題としては、あくまで教訓的な説教という形で呈示されてはいない。「教訓」というものは、人生そのものの動きの中の当然の結果としてのみ存在している。例えば、Wang Lung が、かつて富と地位を勝ち取ったとき、庶民に対して輕蔑の念を抱くくだりの中で、教訓的なものが引き出せるような場合でも、何ら説教めいたものを試みようとはしていない。ただ、読者の心の中に、人生のあるべき道、人間のあるべき姿といった普遍的真理だけが鳴り響いているに過ぎない。

人生における成功や失敗、情熱、献身、高度な喜び、悲しみという悲惨な瞬間、不断の変化——端的に言えば、人生という大冒険ということだが、こうした生存の諸相が絶えず回想されるのである。人生とはそういうものだ、という

意味では、この小説は教訓的であるかも知れない。The Good Earthに描かれた生活のページェントを観察することで、読者はより一層深く自分を知るようになるばかりではなく、人生というものを、より十分に、より包括的に知るようになる。恐らくこれは、Henry Seidel Canbyの言葉を借りれば、The Good Earthが「現代の世界文学に、永遠に寄与する作品の一つに数えられる」<sup>(28)</sup>最大の理由の一つであろう。

Oscar CargillはPearl BuckのHouse of Earth 3部作(The Good Earthは3部作の第1部)とEmile Zola(1840~1902:フランスの自然主義作家)の「ルゴン＝マッカー双書」(Zolaの代表的大作)との、ある一般的な類似点を指摘している。Cargillが類似点と指摘している点は次の通りである。

まず第1は、Wang家とルゴン＝マッカー家は、共にそれぞれの時代と国家を代表していること。

第2は、Wang家の繁栄は、1人の男の、土地に対する欲望から始まり、これは部分的ではあるが、ルゴン夫人の欲望と対照的であること。

第3は、愛情と誕生、家族の喧嘩などを詳述することに力点を置いていること。

そして、第4は、Pearl BuckとEmile Zolaは共に商人階級を憎んでいたこと、<sup>(29)</sup>などである。更に、Cargillは題名の点でも、The Good EarthとZolaのLa Terreの類似点を指摘している。しかし、Pearl BuckとZolaの異なる点は気質である、と彼は強調している。具体的に言えば、Pearl Buckは情緒的でなく、素朴で、規律正しい。一方のZolaは気まぐれで、興奮しやすく、多弁であるということである。結論として、2人の相異点は基本的には文体の違いであって、視点の違いではない、と結んでいる。

Pearl Buck自身は、Zolaの影響力を容認している。<sup>(30)</sup>これは確かに明らかなことである。事実、The Good Earthは多くの点で自然主義的である。例えば、題材に対するドキュメンタリー的なアプローチ、偏見のない、客観的な表現、環境や伝統の要因を強調していること、構成や詳細な叙述の正確さ、社会の下層階級に生きる、貧困で気どらない人々への関心、などが挙げられよう。しかし同時に、Pearl Buckのアプローチの仕方とEmile Zolaのそれとの間には、いくつかの相異点もある。彼女は、悲惨さ、残忍さ、卑劣さという主題には、殆ど

関心がない。しかし、これらの要素を特に強調したい場合は、読者に衝撃を与えたり、恐怖を与えようとして、人生のいやな面を意図的に強調することなく、あるがままの姿を、もっと均衡のとれた、健全な形で関心をもたせようとしていることである。<sup>(31)</sup>

Wang Lung という人物の性格描写が荒っぽいという非難があるが、それに答えて、Pearl Buck は、自分の描く主人公については、その人物の生きている時代背景や場所を十分に考慮した上で描写がなされている、と反論している。現代の上流社会の感覚からすれば、Wang Lung は荒っぽく描かれた人物に見えるかも知れないが、しかし、これについて Pearl Buck は、Wang Lung はありのままの姿で描写されなければならない、つまり、人生に忠実でなければならない、と主張している。<sup>(32)</sup> 彼女自身は、Wang Lung を荒っぽい人物に仕立てたとは考えていない、むしろ実在するような、普通の人物、しかも、時代と場所を考慮すれば、当然あるべき人物と考えている。

Pearl Buck の創作態度は徹底した自然主義作家のそれとは違っている。Zola の自然主義と The Good Earth に見られる自然主義的諸相との主な相異点は、自由意志に対する両作家の創作姿勢の中に秘められている、と言えよう。Zola の世界では、社会的権力や、経済力が人間に重圧感を与え、人間個人を精神的に押しつぶして、殆ど無能力なものにしてしまう。従って、Zola の描く人物は、決定論的な世界で捉えられ、伝統と環境によって作り上げられていく。これに反して、The Good Earth の場合では、自由意志というものが、かなり影響を与えているのは事実である。Wang Lung の叔父やその妻が、不幸な運命を嘆き悲しみ、そしてその不幸の責任を自分たちの力ではどうしようもなくなったときに、この貧困さというのは、基本的には、目に余るほどの怠惰な生活や世間での噂、それに、賭博などの問題から生ずる当然の結果であることに、Wang Lung は気づくのである。こうしたことが、この小説の冒頭に登場する Wang の親類を貧困や不成功に導びく特徴的な理由となっている。Wang 自身は勤勉で儉約家、そして献身的であることから、周囲のさまざまな限界を乗り越えていく。事実、大規模な略奪により手に入れた大金のおかげで、Wang は経済的地盤を堅固に築くことになるのだが、何よりも勤勉で、主導権を握っていたことが、彼



を裕福な生活に導いていく結果となったのである。Pearl Buck 自身の人生観は Zola のそれとは正反対である。彼女は自叙伝の中で、次のように述べている。

I learned early that trouble and suffering can always be relieved if there is the will to do it, and in that knowledge I have found escape from despair throughout my life.<sup>(33)</sup>

また、こうも述べている。

Man can shape his world if he does not resign himself to ignorance.<sup>(34)</sup>

厳正な意味論上の点から言えば、Pearl Buck の作品は、自然主義というよりは、むしろリアリズムに近いと言った方が適正な表現であるかも知れない。Zola のような作家の悲観論や絶望観は、物事そのものの姿を肯定的に見る Pearl Buck のアプローチや、一般的に彼女の作品に見られる基本的な改善論とはかなりかけ離れている。彼女はよく、“永遠なる悲哀の手記”を記録してはいるが、悲観論者というよりは、むしろ楽観論者なのである。Van Wyck Brooks は The Good Earth を、Balzac(1799~1850)、Moliere(1622~1673)、Dickens(1812~1870) などのように、人生に対して積極的、かつ励みとなるような取り上げ方を伝える作家たちの作品と正確に関連づけている。<sup>(35)</sup>

しかし、Pearl Buck は自分の作品に関しては、自然主義という言葉を好んで使っている。中国人生活の自然主義という言葉についても、何回となく触れているが、これはセックスの問題、言葉の問題、死活問題などの、中国人の包み隠しのない率直さを意味しているのである。従って、The Good Earth における自然主義は、農村地帯の中国人生活の姿をありのままに記録しているのに過ぎないのである。つまり、その題材をわざとらしく自然主義的方向にゆがめようとしたり、意識的に構成し、先入観を持ちながら自然主義的な作風にはめ込むようなことはしていない。この小説の自然主義というのは、まさに生活自体を率直に注視したものである。アメリカの清教徒的態度とは全く異なった中国人

の、自然で誠実な態度を、Pearl Buck は賛美しているのである。彼女はかつて、Ernest Hemingway が自然主義的な視点から人生にアプローチした勇気を讃えたことがある。その際、Hemingway の自然主義はアメリカ人にとって比較的新しいものである、と指摘しているが、中国においては、このような態度は極めて一般的なものである、と述べている。彼女の説明によれば、中国人生活の自然主義は、一言で言えば、真実であるという。中国での幼少時代のときでさえ、Pearl Buck は普通のアメリカ人であれば、驚きと嫌悪をもって見守るような、男女の織りなすさまざまな自然の成り行きを目撃している<sup>(36)</sup>。

Pearl Buck は、初期の頃の作品で、特に自然主義的作風の諸相を好んで取り入れている。また、Theodore Dreiser(1871～1945)の作品にかなり敬意を表していたようである。Dreiser の綿密な取材や、経済的、社会的、環境的諸要件への気配り、基本にある情緒や人生の諸問題への関心、それに一見したところ、題材に対する“客観的”なアプローチなどが、Pearl Buck 自身の経験や視点に関係しているのは明らかである。しかし、彼女は人間性の中に発見した自信と独創の、2つの要素を高く評価していたので、決定論的な自然主義的概念に与するようなことはなかった。The Good Earth に描かれる世界というのは、しばしば悲しく、悲劇的、敗北的、風刺的、そして、欲求不満的な世界であるのかも知れないが、と言って希望のない世界では決してないし、努力する人間を完全に衰弱させるような世界でもない。Goethe(1749～1832)のように、Pearl Buck は、人間としての「努力」を積み重ねる限り救われるという、ファウスト的な感覚を容認しており、人生や人間の野心をも肯定している作家なのである。

## V おわりに

Pearl Buck は、自分の作品を自然主義的範疇に属する文学と自認している。文学的には、自然主義に属するというより、むしろリアリズムに属すると言った方が妥当かも知れない。純粹な分析からすれば、自然主義と言えるかどうか、疑問のあるところではあるが、特に Pearl Buck 自身が好んで主張する自己作品の自然主義とは如何なるものなのか、彼女の長編代表作である The Good Earth

だけに絞って分析考察したものである。

考察にあたっては、自然主義的傾向の可能性という視点から、Pearl Buck 特有の文学上の普遍性、文体構成の特異性、比較文学論などの背景的要素を分析しながら試みたものである。主題の重さに比べ、代表作とは言え、*The Good Earth* だけに限って結論を導き出すのは早計かも知れないが、中国の舞台をテーマとする大部分の長編小説が、文学的主張という点では、ほぼ同じ傾向のものであるだけに、*The Good Earth* の一作品を追求しても、ある程度、意図する結論を導き出せたのではないかと思う。

〔注〕

- (1) Pearl Buck, "The Good Earth", Standard edition(New York: Day, 1949), p. 315.
- (2) Pearl Buck, "My Several Worlds" (New York: Day, 1954), p. 128.
- (3) "The Good Earth" は Owen Davis と Donald Davis の脚色によりドラマ化され、1932 年 10 月 17 日に New York の The Theatre Guild で上演された。
- (4) 映画台本は Talbot Jennings, Tess Slesinger, Claudine West の 3 人の共同執筆で、John Gassner 編集による "Twenty Best Film Plays" (New York: Crown Publishers, 1943), pp. 875-950. に転載されている。
- (5) Pearl Buck, "The Good Earth", standard ed. の序文, pp. v-xvi.
- (6) "My Several Worlds", p. 255.
- (7) "The Good Earth", standard ed., p. viii.
- (8) Pearl Buck, "The Revolutionist", Asia, 28(September 1928), pp. 685-89, 752-56.
- (9) J. Donald Adams, "The Shape of Books to Come" (New York: Viking, 1944), p. 125
- (10) "The Proceedings of the American Academy of Arts and Letters and the National Institute of Arts and Letters", Second Series, No. 3 (New York: American Academy of Arts and Letters, 1953), p. 22.
- (11) James Gray, "On Second Thought" (Minneapolis: University of Minnesota Press, 1946), p. 33.
- (12) J. Donald Adams, p. 125.
- (13) Carl Van Doren, "The American Novel 1789-1939", rev. ed. (New York: Macmillan, 1940), p. 353.
- (14) Joseph Warren Beach, "The Twentieth Century Novel" (New York: Appleton-

Century-Crofts, 1932), p. 233. この中に “The Good Earth” に関する簡潔な、歯切れのよい論評が載せられている。

- (15) Pearl Buck, “Advice to Unborn Novelists”, *Saturday Review of Literature*, March 2, 1935, p. 520.
- (16) Ibid.
- (17) S. J. Woolf, “Pearl Buck Talks of Her Life in China”, *China Weekly Review*, Sept. 24, 1932, pp. 145–146.
- (18) Carl Van Doren, p. 353.
- (19) Phyllis Bentley, “The Art of Pearl S. Buck”, *English Journal*, 24 (December 1935), p. 794.
- (20) Alexander Cowie, “The Rise of the American Novel” (New York : American Book Co., 1948), p. 748.
- (21) Ibid. p. 751.
- (22) Phyllis Bentley, p. 798.
- (23) Oscar Cargill, “Intellectual America : Ideas on the March” (New York : Macmillan, 1941), p. 149.
- (24) Ibid.
- (25) William Lyon Phelps, “Autobiography With Letters” (New York : Oxford University Press, 1939), p. 912.
- (26) James D. Hart, “The Popular Book” (New York : Oxford University Press, 1950), p. 253.
- (27) Ibid.
- (28) Henry Seidel Canby, “The Good Earth : Pearl Buck and Nobel Prize”, *Saturday Review of Literature*, Nov. 19, 1938, p. 8.
- (29) Oscar Cargill, p. 148.
- (30) The John Day Company(出版社)から Dr. Paul A. Doyle(ニューヨーク州立大学教授)あての私信。
- (31) Emile Zola の “La Terre” と Pearl Buck の “The Good Earth” と比較すれば、この点が明白となる。
- (32) Cornelia Spencer, “The Exile’s Daughter”, p. 175.
- (33) Pearl Buck, “My Several Worlds”, p. 19.
- (34) Ibid., p. 53.
- (35) Van Wyck Brooks, “The Writer in America” (New York : Dutton, 1953), p. 187.
- (36) Pearl Buck, “My Several Worlds”, p. 317.